HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	話しことばの特徴
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	言語発達心理学, 内田伸子編著, (放送大学教材), ISBN: 4595587619, pp.151-161
Issue Date	1998-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44719
Type	bookchapter
Note	11.
File Information	YKHH1994_151-161.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

11 話しことばの特徴

話しことばは最も原初的な言語活動である。ここでは話しことば全般について，書きことばと比較しながらその特徴を考察する。話しことばに伴う身ぶり動作やコミュニケーションの文化差などについてもふれる。

1. 話しことばの特徴

●話しことばの制限

文字によるコミュニケーションと音声によるコミュニケーションの違いは何だろうか。最も大きな違いは，文字が時間的にも距離的にも大きな範囲で情報伝達できるのに対し，音声は届く範囲が限られており，しかもその場限りで消えてしまうということであろう。この制約のために，特別の機器を用いない通常の音声によるコミュニケーションでは，情報の発信者と受け手は比較的近くにいることが必要となる。また伝達される情報量は，発信者と受け手が覚えておける量（メモなど外的な補助なしに記憶できる量）に限られる。

●フィードバック

このような話しことばにおいては，フィードバックが重要な役割を果たす。発信された情報を受け取ったならば，受け手は発信者がもはやそのことに気を使わなくてもすむよう，うなずいたり返事をしたりして，情報が伝わったことを示す。発信された情報が不十分であったり，発信された情報内容を受け手が聞きもらしてしまった場合は，受け手はけげ

んそうな顔をしたり問いなおしたりして，情報が伝わっていないことを示す。フィードバックは話しことばの制限を補い，会話に必要な情報処理の負荷を大きく軽減する。実際，受け手もなく，したがってフィードバックもない話しことばは，ほとんど生じないか，生じたとしても心理的な負荷が高い。このことを検討するために，受け手のあるなし，フィードバックのあるなしで話しことばを分類してみよう[1]。表11-1を見てほしい。

表11-1　話しことばの分類

受け手	フィードバックがある	フィードバックがない
誰もいない	－	ひとりごと 行動調整言語
いるかどうか不明	－	かけごえ 案内放送
いる	会話	スピーチ 講義

（仲，1990）[1]

①誰もいない場合の発話：受け手がいなくても生じる発話はある。「よし，やるぞ」とか，「これは，こうすればいいんだな」といった行動調整のための発話やひとりごとである。だが行動調整のための発話やひとりごとは，2～3歳の幼児では頻繁にあらわれるものの（これを自己中心語という），やがて消失し，大人ではほとんどみられない。

②相手がいるかどうか不明な場合の発話：いるかいないか分からない相手に発話する場合には，発話に音程がつく傾向がある。「○○さん，いらっしゃいますかー」，「○○ちゃーん，あーそびーましょう」などである。行商人の呼び声「いーしやきーいもー」や「ものほしーさおだけ

ー」のように，不特定多数に呼びかける場合にも音程がつくようである。エレベーター嬢の案内，バスガイドの説明，今ではほとんど聞かれなくなったが駅前のアジ演説などにも音程がつく。同じメッセージでも，相手が目の前にいれば音程はつかない。どうして音程がつくのか。相手が聞いているかどうか分からないのに声を発するというのはそもそも不経済であり，無意味な行為である。これが有意味となるためには，発話はメッセージと「歌」という二重性をもたなければならないのかもしれない。また案内やバスガイドの説明のように，外的な支え（原稿やメモ）やフィードバックの助けなしに長い発話を行うには，メッセージを歌のようにして覚えるのが有効なのかもしれない。

③受け手がいてもフィードバックが期待できない場合の発話：受け手が目の前にいるにもかかわらずフィードバックが期待できない発話の例としては，式典でのスピーチや演説，講演や学校での講義などが考えられるだろう。このような発話では，発信者は構造化された文章を順序よく，繰り返すことなく語らなくてはならない。いわば文章の音声化であり，認知的な負担は大きくなる。しばしば原稿が準備されるのはこのためであり，また実際，スピーチや演説は文章を暗記することによって行われることも多い。

④受け手がいてフィードバックが期待できる場合の発話：フィードバックが期待できない話しことばは生じないか，生じたとしても話すのにかなりの努力を要する。これに対し，会話では即座にフィードバックが与えられ，発信者の負担は大きく軽減される。会話であれば2時間でも3時間でも続けることができる。会話は話しことばに最も適したコミュニケーション様式であるといえよう。

2. 話しことばと動作

文字という純粋に言語的な表現手段によって媒介される書きことばと異なり，話しことばは音声言語にとどまらない身体全体の活動でもある。ここでは話しことばに伴う動作についてみていこう。

●手の動き

話しことばは音声を主な媒体とするが，そればかりではない。話をするときには身体も動いている。マクニール（McNeil, D.）はつぎのような実験を行った[2)]。5人の被験者に短いアニメを見せ，後で内容を話してもらう。その様子を録画し，話しことばとともに生じる動作を分析するのである。その結果，表11-2のように，意味に対応した手の動きが被験者間で共通にみられることが分かった。また，①同じ手の動きでも，意味が異なる場合にはそれらを区別する別の動作が加わること（右手をあげる同じ動作が2度続いても，一方が「彼」を，他方が「彼の口」を示すようなときには，間に無関連な動きが挿入され，両者が区別される），

表11-2　言語表現と手の動き

被験者A～Eの発話と手の動き。[　　] 内は手の動きを示す。

A：排水管をあがって［手をあげ，上を指さす］
B：ビルの排水管をよじ登って［手をあげ，上を指さし始める］
C：そこで今度はパイプを登って［手をすばやくあげ，手をバスケットのように開く］
D：今度は雨どいの中をあがろうとして［手は動かず上を示す。それから指さししたまま手をすばやくあげる］
E：雨水のタンクによじ登ろうとして［手の関節を上下に曲げる］

（McNeil, 1985）[2)]

②複雑な意味はことばと動作のふたつのモードで相補いながら表現がなされること（ことばで「追いかける」と述べ，「かさを振り回しながら」の部分を動作で示す）なども明らかになった。このことからマクニールは，動作は言語と同様，意味を担うシンボルとして機能すると述べている。

マクニールはさらに以下のような理由をあげて，動作とことばは共通の過程をもっているのではないかと考察している。

・動作は話しことばの最中でのみ生じる。話の切れ目では生じない。
・表 11-2 にもみられるように，動作は意味を担い，文脈に応じた語用論的な機能ももつ。
・動作は節などの言語的な単位と同期して生じる。
・失語症ではことばと同時に動作も消失する場合がある。
・子どもではことばと動作がともに発達する。

●動きを禁じると

動作を禁じると，ことばは出にくくなる。フリックとグッテンタグ（Frick, D. J., & Guttentag, R. E.）は，単語の定義から単語を当てる課題（たとえば「ピアノやオルガンの音を出すために指で押すところを何というか」など）を，つぎのような条件で被験者に与えた[3]。一方の条件では被験者に両手で棒を握らせ，手の動きを禁止した。もうひとつの条件の被験者は，普通に手を動かすことができた。その結果，手の動きを禁止した群で成績が低くなった。

手の動きを禁止すると，考える過程（定義から答えを探しだす過程）が妨害されるのだろうか。それとも答えを声に出す過程が妨害されるのだろうか。フリックらはつぎの実験で，このことを検討している。まず両群の被験者にすべての課題を与え，あらかじめ答えを予想しておいてもらう。その後，一方の群は手の動きを禁止し，他方の群はそのままの

状態で，予想しておいてもらった答えを言ってもらう。この実験では禁止した群もしない群も成績に差はなかった。手の動きを禁止することは，声に出す過程ではなく，単語を探す過程を妨害するようである。

10章で，日本人学生と留学生の会話を紹介した[4]。日本語の会話では日本人学生が，留学生が得意な英語の会話では留学生が，会話の主導権を取り会話を進めていた。このときに収録したビデオテープを見直し，動作について調べたところ，英語で会話をするときには日本人の，日本語で会話をするときには留学生の手の動きが多く，話しにくい言語のほうが動作が生じやすいことが示唆された。動作は語彙や知識情報の検索を促進するらしい。

●あいづち

聞き手がいてフィードバックを与えることができる状況では，聞き手による動作ーうなずきやあいづちーも会話をスムーズに進行させる働きを担う。下の例は，ラジオの対談番組の発話の一部である。(　　)は受け手によるあいづちを示している。あいづちが必ずしも意味の切れ目に対応していないことがわかる[5]。あいづちは，「了解した」というよりも「聞いている」ということを示すフィードバックとして機能しているようだ。

> 「こう塔があって，(ソーソー) 真ん中まではイスラムで建てて，勝ったから，そこからは (ソーソーソー) 耶蘇教になってるちゅうね」

小林[6]は，聞き手が話し手に対し普通にあいづちを打つ条件と，打たない条件とで，話し手の話しやすさを検討している。被験者に与えられた課題は絵を見て物語をつくるというものであった。話したときの不安

の程度や話しやすさ，満足度などを評定してもらったところ，あいづちのない条件では話し手の不安が高く，また話しやすさや満足度が低くなることが確認された。

最も，あいづちの打ちかたには文化差があるように思う。たとえば日米のテレビ番組を比較してみると，日本人の対談では，聞き手が話し手の発話に頭を振ったりあいづちを打ったりすることが多い。これに対しアメリカ人の対談では，聞き手が話し手の発話に身じろぎもせずじっと聞き入るというような態度がみられる。次節では，このような文化差について，もう少し検討してみよう。

3. 会話と文化

●コミュニケーションに伴う態度の文化差

会話は表情，視線，身ぶり動作，あいづちやうなずきなど，言語以外の情報をたくさん含んでいる。異なる文化的背景をもつもの同士が会話する場合，このような非言語的な要素の重要性が顕在化する。人類学者バーレイはアフリカのドワヨ族の言語文化をつぎのように記述している（シーガルの引用による）[7]。

> 何はともあれ，私は落ち込んでいた。ドワヨ族の人々から一度に聞きだせるのはせいぜい10語ぐらいであったからである。儀式のことでも動物のことでも，何かについて語ってもらおうと頼むと，彼らは1文か2文話した後，やめてしまうのである。もっと多く聞きだすためには質問をしつづけなければならなかった。こうやって収穫のない2か月がたったころ，私はあることに思い至った。我々西欧人は，人が話しているときには邪魔をしてはいけないと教

えられる。だがこれはアフリカでは当てはまらないのだ。・・・誰かが話しているのを聞くとき，ドワヨ族の人々はこっちの床やあっちの岩などに落ち着きなく目をやっては「はあ」，「そうだ」，「なるほど」など，およそ5秒に1回くらいの割でつぶやく。私がこれをしなかったために，話し手はすぐに話をやめてしまったのだ。この方法を用いるようになってからは，面接はずっと順調に進むようになった。

シーガルは，この他にも，アボリジニ族の例やマヤ族の例など，西欧の会話文化が成立しないコミュニケーションの様式をあげている。アボリジニ族は，オーストラリア白人が攻撃されていると感じることのないよう，うなずいたり，あいづちを打ったりするのだという（これを「無意味な同意」という）。またマヤ族では，子どもは大人と自由に話ができない。大人である研究者が子どもから話を聞きだそうとすると，彼らはもじもじと居心地悪そうにし，視線をそらし，また，自分が大人よりも知識がないことを示すためにcha（「・・・と私は教えてもらっている」）という語を入れて語るという。

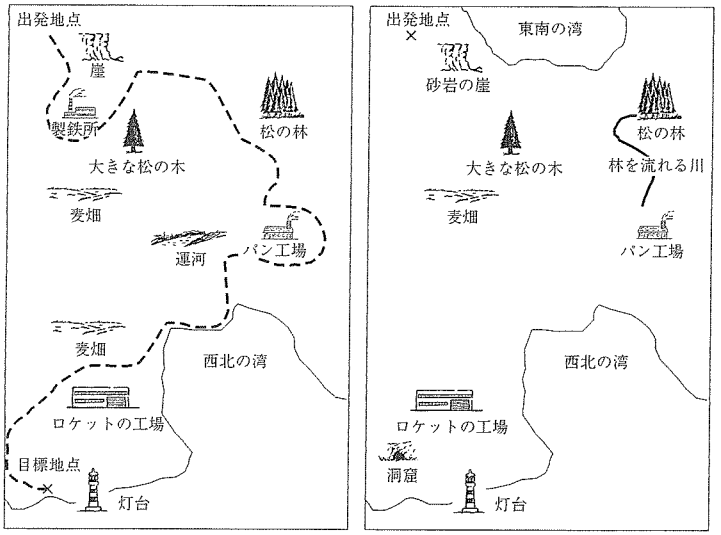
うなずきやあいづちについては，日本にもドワヨ族やアボリジニ族と共通するものがあるように思う。日本人はうなずきやあいづちの少ない西欧人と話す場合，つきはなされているように感じることがあるが，西欧人にとっては我々のうなずきやあいづちがうるさいと感じられることもあるようだ。欧米の官僚やビジネスマンから，日本側は同意していないのに「Yes」と言い，何を考えているのか分からないと評されることもある。そっくり反って話す，目をあわさないで話す，返事のかわりににやにやするだけなど，日本では馴染のない様式でコミュニケーション

を行ったため誤解されたという留学生の話も聞いたことがある。このようなとき，やはり会話は言語情報だけではないということが強く意識される。

●より全体的な会話研究

会話に関する心理学的な研究は，限られた文脈における発話を単位として行われることが多かった。しかし全体的な活動としての会話の過程を調べ，また意識化されない文脈をも明らかにするためには，視線，表情，うなずき，あいづち，態度などを分析の対象とする研究が行われねばならないだろう。また話す相手を変えて会話資料を収集することにより，話者同士が共有している文脈を明確にするという試みも望まれる。たとえば母子対話であれば，従来は母親と子どもの間でのみ資料を収集することが多かった。だが，あえて母親と大人他者，子どもと大人他者など相手を変えての会話資料を収集することで，話者がどのような文脈的仮定のもとに発話しているのかを明らかにすることができるだろう[4)8)]。

このような会話資料収集の試みのひとつに，筆者を含む多くの言語研究者が共同で作成しつつある千葉大学地図課題対話コーパス（コーパスというのは大量の言語資料のことである）がある[9)10)]。このコーパスは，エディンバラ大学で作成された地図課題コーパス[11)]を踏襲したもので，ルートが描かれている地図をもつ話者が，ルートのない地図をもつもうひとりの話者にルートを説明するという課題で交わされた会話を収録したものである（図 11 - 1）。話者はお互いの地図を見ることはできない。4 人の被験者 A1，A2，B1，B2（A1 と A2，B1 と B2 はそれぞれ顔見知りである）を組みあわせて親近性のあるペア（A1 − A2，B1 − B2），また親近性のないペア（A1 − B1，A2 − B2）をつくり，それぞれの会話における音声，表情，視線情報などを，被験者・情報ごとに異なる媒



ルートのある地図（左）とルートのない地図（右）

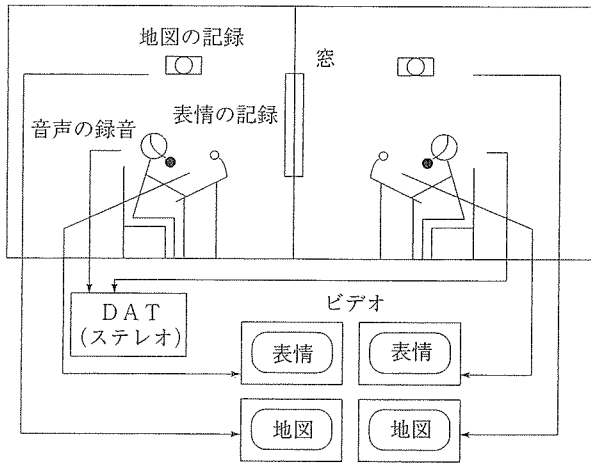


図11-1　地図課題コーパスで用いた地図（堀内他，1997）[10]と会話の状況

体（DAT，ビデオテープなど）に収録した。言語情報はミリセカンド単位で転記され，現在はあいづちや話者交替などに関する韻律情報の分析が進んでいる。総合的な行動としての会話を，文脈比較，通文化比較していくことで，話者が会話において暗黙のうちに抱いているさまざまな仮定を明らかにしてゆくことができるだろう。

●参考図書

マクニール, D.　鹿取廣人訳『マクニール心理言語学―「ことばと心」への新しいアプローチ』サイエンス社（1990）

仲真紀子「会話」内田伸子編著『言語機能の発達』新・児童心理学講座　第6巻　金子書房（1990）